博　多
通巻No.72

博多に強くなろうシリーズ　No.63

奔放にロマンを追求した「檀一雄」

お話
女優　檀　ふ　み氏

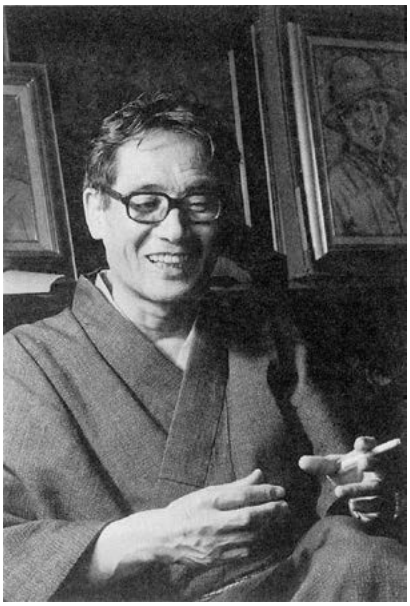
聞き手
元 福岡シティ銀行 頭取　四　島　　司

対談　平成8年5月

■西日本シティ銀行は「ふるさと博多」「ふるさと北九州」をふりかえるシリーズを発行しています

ココロがある。コタエがある。
西日本シティ銀行
http://www.ncbank.co.jp

奔放に ロマンを追求した 檀一雄



お話

女優
檀　ふ　み氏

聞き手

元 福岡シティ銀行 頭取
四　島　　司

石の上に雪を 雪の上に月を

四島　ときどきお目にかかりますね。今日はお父上の**檀一雄**さんのお話をうかがいます。

お亡くなりになって何年になりますか。

檀　父は筑紫野市の柳沢病院で肺ガンを発見され、九州大学病院で治療をうけました。亡くなったのは、昭和五十一年一月二日で、もう二十年になるんですね。

「人は二度死ぬ」という言葉がありますね。一度は肉体の死。二度目は人から忘れ去られたときと。

二十年経って、父の話をとお声がかかったり、新しい世代の人たちに作品を読んでいただいたりするのは、娘として、とてもありがたいんです。いまも父が生きているんですから。

でも、父が喜んでいますかどうか。

四島　それ、墓碑銘の詩でおっしゃってるんですね…。

檀　はい。父が夢の中でつくったとか。うまく言えますかどうか。

「石ノ上ニ雪ヲ　雪ノ上ニ月ヲ
ヤガテ　ワガ　コトモナキ
シジマノ中ノ　憩イ哉　」

ですね。

四島　いいですね。

でも、いまの時代が、多くの人たちが、檀一雄さんの風と作品の魅力に、アンコールをかけている。素晴らしいことですよ。

それに福岡とご縁の深い方ですね。

檀　はい。生まれは祖父の勤めの関係で山梨県なのですが、すぐに故郷の柳川にあずけられます。

それから久留米、福岡、東京の谷中と転々。中学は栃木県の**足利中学**（旧制）、そして多感の青春時代は、旧制の**福岡高等学校**です。

福岡市の**能古島**（のこのしま）を終（つい）の栖（すみか）にえらんでいますし、亡くなったのは九州大学病院です。だから柳川と福岡が〝父の故郷〟だったのですね。

終焉を迎えて スコットの言葉

四島　銀行は、檀一雄さんの、最期のお言葉をひとついただいているんですね。

檀　えっ。どんなことなんですか。

司会　銀行は各界で活躍されている方々のお話をうかがって、新聞の朝刊に載（の）せているのですが、亡くなられる一カ月ほど前に、檀一雄さんのお言葉

（別掲）をいただいています。

快諾していただいたのですが、あとで、ご病状が悪いときだったと知って、胸が痛みました。

檀　病室のドアに面会謝絶の札を下げていましたが、知り合いの人たちが、自由に次々と出入りして。父は、サービス精神が旺盛だったから（笑）。

司会　どうもすみません。

入院されていた九州大学病院にお訪ねして、お母様にお目にかかりましたが、すぐわかりました。ふみさんとそっくりさんでいらっしゃって。

先生にはご病臥中でお目にかかれませんでしたが、お母さまから、こういうことを申しておりますと、お話をお伝えいただいたのです。

檀　その頃の父は肺の病状がだいぶん進んで、喉をぜいぜいさせていましたから、お目にかかれなかったのでしょうね。

四島　檀さんは病床で、人生のフィニッシュを、じっと見すえておられたのでしょうか。じつに、深いお言葉で。

檀　ああ、これだったんですか。

昨年、**沢木耕太郎**さんが『新潮』に小説『檀』を発表されましたが、そのために、母にずいぶん父のことをお聞きになったんです。

そのとき母が、「亡くなる前に、なんとか探検隊長の話をしていたの。その人が亡くなるときに、美しい光みたいなキラキラしたものを、見たとか言うことだったけど、誰の、なんの話だったか。どうしても思い出せないの」と悔やんでいました。

最期のときを迎えた南極探検の**スコット隊長**のお話だったのですね。母に伝えておきます。なにかしら、胸がつまります。

＊スコット（ROBERT FALCON SCOTT 一八六八～一九一二）。イギリスの探検家。海軍大佐。一九一二年一月十八日、アムンゼンに約一か月遅れて南極点に到達したが、帰途悪天候のため死亡。

西島伊三雄スケッチ訪問

おはよう皆さん

作家 檀一雄氏

スコット探検隊長は、その死の直前、まわりの極地の空模様を見まわしながら、「おだやかで、美しく、キラキラとまばゆい日ざし！」と言いています。自分の本分をつくした人だけが言えるスガスガしい言葉ではありませんか。

ざわめきのなかの孤島
〝能古島〟

四島　檀一雄さんは、終の栖にどうして能古島を選ばれたのですか。

檀　父は〝新宿路地裏の孤独〟が好きだったんですね。

ざわめきの中の静寂が好き。ほどほどの離れぐあいがよかったんでしょう。

はじめは、五島列島に行きたかったんです。でもあまりにも遠いし、次は佐賀県の呼子町の加部島を考えたようですが、空港に遠くて不便でしょう。

当時はファックスもありませんから営業にも差し支える（笑）。それでみあわせたんですね。

四島　〝新宿路地裏の孤独〟ですか。わかりますね。本当の孤独は、耐えられないですよ。

檀　だから、父は放浪の作家と言われているけれども、タクラマカン砂漠には行かない。そう、女々しいんです。

シルクロード回遊が十五回の、四島さんのほうが、漂泊の詩人かもしれない（笑）。

四島　いや。モンゴルの王者のような豪放な檀さんの情感の一側面で、いいですね。

檀　だいたい博多の人は、あけっぴろげだけど、内には孤独を秘めて…。

四島　博多の屋台が、そうなんです。ざわめきの中の孤独で。

檀　能古島は、ざわめきの福岡につつまれながら、自然のたたずまいが残っている。それに父が惹かれたんですね。

以前に唐津の断食道場にはいったとき、しばらく能古島で保養したことがあって、能古島に愛着を感じていたのでしょうね。

若い時から懇意にしていた**榎本求仁也**さんという方と、「このしまアイランドパーク」の**久保田耕作**さんの、お骨折りで能古島に終の栖となる家を見つけたそうです。

それに、父は衝動買いの名人なんだから（笑）。

四島　それで檀一雄さんが、福岡市の

能古島の居宅

檀　ふみさん

住民になられた。すばらしい衝動買いでしたね（笑）。

司会　西日本新聞の聞き書きシリーズ『島を拓く』の久保田さんのお話が面白いですね。

「南向きの日当たりのいい空き家を世話したが、特別に見に来た様子はなかった。千二百万円だったが、登記の時に五百万円足りなかったので立て替えたら、すぐに返してこられた。

『檀流クッキング』の著者だけに、いつも変わったものを食べさせられた。大きな里芋に、豚肉を挟んで煮込んだものなどは忘れられない」と。

四島　檀さんらしいですね。そのお住まいは、今もそのままに。

檀　はい。近くの方にお願いして管理していただいています。

司会　船着き場から、歩いて五、六分ぐらい。ちょっと小高いところで、正面に博多湾をへだてて福岡市が横たわっている。

とくに夜景は絶景で、先生の詩情をなぐさめたでしょう。

久保田さんのお話をつづけますと、檀さんの**文学碑**のあるアイランドパークの西の高台は、『リツ子・その愛』『リツ子・その死』の舞台となった小田の浜が、海を挟んで正面に見えるところです。

檀さんはそこが好きで、あるとき、ふみさんや兄妹の方たちに、「あそこが、**太郎**兄さんが生まれた所だよ」と、教えておられたとありますね。

檀　懐かしいですね。御無沙汰で、島の方たちに申し訳ないのですが。

司会　その、お宅のすぐそばに、私立の**能古博物館**がありますし。

檀　博物館がですか。

「火宅の人」
昭和50年11月新潮社刊行　装画・サム・フランシス

司会　黒田藩の著名な学者の**亀井南冥**、**昭陽**、**暘州**、**玄谷**、四代の書や遺品、藩時代の漢籍資料や登り窯趾。大きな北廻船の復元模型まで。

美術館には、島出身の**多々良義雄**画伯や、福岡の画家の絵が展示され、孔子聖廟まであっておどろきますよ。

四島　福岡市の人たちが訪ねるアイランドパークがあるし、能古島は奥が深いんですね。

「火宅の人」檀一雄

四島　沢木耕太郎さんの『檀』が、檀一雄復活の大きなうねりに火をつけましたね。

『檀』は小説でしょうが、実録『火宅の人』の趣で、たいへん評判になりました。すぐに本にもなって。

結局、二回読んでしまった。

檀　ずいぶんご用意いただいて（笑）。恐縮です。

四島　作家は自分を凝視し、自分を裸にして小説を書かれるが、死後はまた裸にされる。作家の業を感じますね。

亡くなられて二十年。その光芒と哀しみを見極める宿命に、つき合わねばならない家族の方も、大変ですね。

檀　そうですね。

ある批評家が、檀一雄をこんな女々しい男にしてと書かれていました。でも私は、女々しいっていうのは、そう悪いような気がしないのですよ。格好つけていないんですね。

『火宅の人』には、男の奔放さの裏側のかなしさみたいなものが、感じられますよね。

四島　自分を裸にしてですね。ふつうの女々しさとは違うけれども。

檀　そうですよ。父の、哀しさなんですね。だから、母のほうが、強いのかもしれない。四島さんのお宅もそうでしょう（笑）。

四島　確かに頑固な父よりも、一見従順な母のほうが強かったですね。

檀　九州男児は強いんだけど、人がいい。ぽきっと折れちゃう。愛すべきところがあって、可愛いんだけど。

反対に東北の人は素朴で、守ってあげなければという感じがするけれど、結構人を喰いますね。だから強い。

ふるさとは 柳川と福岡

四島　檀さんの幼少時は、どんな少年だったのでしょうね。

檀　父は、明治四十五年に山梨県で生まれています。明治の終わりの年で、大正元年にもあたるんですね。

祖父の**参郎**が工業関係の技師で、県立試験場などを転々としますが、山梨県に勤務のときに、父が生まれました。祖父参郎が三十一歳、祖母**トミ**が十九歳のときの長男です。

それから三人の妹が生まれるんですが、父が九歳の時に、祖父母の間にもつれがあって、祖母は四人の幼な子を残して家を出るんです。

四島　幼少から試練の運命に。大変ですね。

檀　四人の幼な子を残して家を出た祖母の心中も。父に「艱難、汝ヲ玉ニス」の、書き置きを遺していたそうです。

それから妹たちは祖父の里の、柳川の沖端にあずけられ、父は足利中学（旧制）まで祖父と一緒に暮らすんです。食事当番も日常だったそうで。

楽しみは、毎年の夏休みに、柳川へ帰って、毎日泳ぐことだったそうです。

四島　たくましいなあ。檀さんの不羈奔放さは、そこらへんからなんですね。

檀　そして福岡高校（旧制）から東大経済学部へ。そこで**太宰治**さんとの交友がはじまるんですね。

昭和十一年に東大を卒業しますが、そのころ「夕張胡亭塾景観」が芥川賞候補におされます。

最初の作品集『花筐』の出版を、**佐藤春夫**先生の装丁ですすめますが、出版記念会の日に、中国との事変が起こって軍の召集がくるんです。

四島　時代の激動を、もろに受ける世代でしたね。

檀　祖母は再婚しますが、気持ちの広やかな人だったようで、再会した父に前の奥さんの**律子**さんとの結婚を勧めています。

四島頭取

律子さんが亡くなられて、作家の**与田準一**さんのお世話で母**ヨソ子**と再婚するんです。母は遺された太郎を育てながら、**次郎**（病没）、**小弥太**、**ふみ**、**さと**を生みます。私たちは五人兄妹です。

父と再会した祖母は母にもおおらかに接し、父をよく支援したそうで、母が立派な人だったといっています。

四島　直木賞をうけられたのは。

檀　昭和二十六年に、『長恨歌』と、『真説石川五右衛門』で、第二十四回直木賞を受けています。秋頃、**坂口安吾**さんが家に同居され、暮れには捕鯨船に同乗して南氷洋へ行っています。

私はまだ生まれていませんが、母は大変だったでしょう。

四島　いやあ。文学、放浪、そして家庭。目まぐるしいですね。

ヒューヒュー 胸に モガリ笛

四島　能古島の、檀一雄さんの**文学碑**が素晴らしい。

司会　アイランドパークの近くで、小田の浜を遠望するところに大きな自然石で。

檀　絶筆の「もがり笛」の句が父の書で刻まれています。

もがり笛は、冬の木枯らしの風が、ヒューヒュー吹きすさぶ、あの風の声ですね。

モガリ笛
いく夜もがらせ
花ニ逢はん

父が亡くなる前には、木枯らしが病院の窓をゆさぶってヒューヒュー吹いていました。病状も末期で、父は自分の喉を指さしながら、「ホラ、ここにもモガリ笛」と苦笑していました。

四島　花ニ逢はんか。つらいですね。

それだけに、碑の展望のひろやかさに救われますね。

檀　父の文学を愛していただいた作家の**北川晃二**さん、歌人の**六百田幸夫**さん、詩人の**織坂幸治**さん、郷土史家の**高田茂広**さん、親友の榎本求仁也さん、**武富繁晴**さん、地元の久保田耕作さん。その他多くの方々と地元のご厚意で、父が亡くなった翌年の、昭和五十二年五月二十二日に除幕されました。

終の栖を能古島にかまえ、島を愛していた父は嬉しかったでしょう。

四島　檀さんの文学碑はあちこちに。（旧制足利中学）の校庭にも。これは

＊太宰治（明治四二―昭和二三・一九〇九―一九四八）。青森県生まれの小説家。本名　津島修治。人間の偽善を告発する小説を発表し戦後無頼派文学の旗手として活躍。昭和二三年自殺。

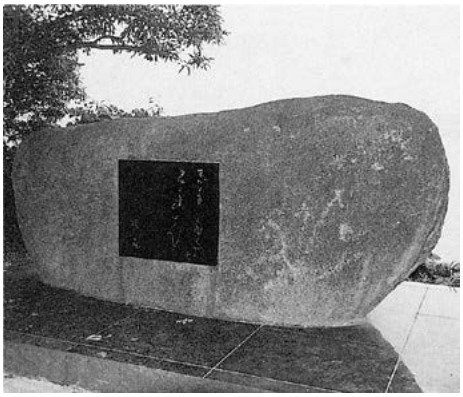
生徒会の決議でたてられたそうです。
それから新潟日報の文化面に関わっていたので新潟市、幼少期を過ごしたふるさと柳川市と、次々に。
そして、昭和四十五年から一年ちょっといた、ポルトガルの**サンタ・クルス**にも。
碑をすすめていただいたのは、文学仲間や、お友達や、ファンの方が多いのです。ありがたい事ですが、たいへん経費もかかることで、父が生きていたら、きっとはにかんで、「もうよか、よか」と言うでしょうね。ちょっと、多過ぎるみたい（笑）。

四島　いいじゃないですか。ポルトガルまで。檀さんらしい気宇広大さで。
ふれあった人が、みんな自分の檀一雄だと思ってしまう。お父上ぐらい、多くの人を仲間にしてしまう巨きな作家もいない…。

檀　本当にありがたいことですね。
いまも毎年、花どきの五月に能古島の碑の前で「*花逢忌」の集いを催していただいているんです。遺族の私たちがなかなか参加できなくて申し訳ないのですが。

四島　絶筆にちなんで「花ニ逢はん」の集いですね。いいですね。

＊花逢忌　絶筆の〝花ニ逢はん〟にちなんで、毎月五月の第三日曜日に、能古島の文学碑の前で催されている。


能古島の文学碑

〝父帰る〟後の父が好き

四島　ところで、檀一雄さんは小説家ですが、裸の人間味や小説の雄大さ、いつわらない生き方などを見ていると本然は詩人なんでしょう。
人生を謳わずには、書かずにはおられない。
師事しておられたのが佐藤春夫さんですね。佐藤さんはたいへんな詩人だし。そんな気がしてならない。

檀　おっしゃる通りだと思いますね。自分をいつわらないで、父なりに真摯に生きたかったのでしょう。
だから、はたから見れば、家庭が崩壊するようなこともしてしまう。それも父にとってはロマンの追求だったのかもしれません。詩人なら何をしてもいいということではありませんが。

四島　ふみさんにとって、巨きな歩みで人生を駆け抜けられた、お父上檀一雄さんは。

檀　母が、「代表作が前妻との愛を描いた『リツ子・その愛』『リツ子・その死』と、愛人との火宅を描いた『火宅の人』という作家の妻の立場も変なものだが」と述べていますが、「おっかん」とよばれていた母にとっては、耐えがたいこともあったでしょう。
私はリツ子時代は生まれてませんし、火宅の時は小さかったので、ほとんど影響を受けていません。
でも私、〝父帰る〟後の父は、好きなんです。

四島　〝父帰る〟か。いいなあ。**菊池寛**の初期の名作に『父帰る』がありましたね。行動の振幅の巨きな父を許し愛している娘さんの優しさに、搏たれますね（笑）。
ご家庭での会話は？　ふみさんは檀さんを、〝ちちさん〟と呼んでおられたのですね。

檀　父は、佐藤春夫先生をたいへん尊敬しておりました。先生がお嬢さんたちに、ご夫妻を「ちち」「はは」と呼ばせておられたので、父がその高風を（笑）、いただいたと聞いています。
父は「ちちさん」ですが、母はよその家とおなじように、「おかあさん」でした。
父は私たちにとても丁寧な言葉遣いで「ふみこちゃん、何々してください」というふうな塩梅でした。

飲んだくれのやさしい心平おじちゃん

檀　私は幼いころ、佐藤先生の大きな福耳を、触らせてもらうのが大好きで、「おじちゃんお耳ちょうだい」と言って、先生のお耳に触っていたそうです。

四島　可愛い風景ですね。

檀　ところが少し大きくなってから、先生は亡くなられていましたが、「佐藤のおじちゃん」と言ったら、「佐藤先生とおっしゃい」と、ものすごく叱られたのでびっくりしました。
父は文学と人生の師匠である佐藤先生の御名を口にするときは、いつも襟を正す人でしたから、わたしのなれなれしい言葉遣いが許せなかったのでしょう。

四島　豪放磊落とか、天衣無縫とかいわれていますが、内面に……。

檀　磊落にふるまっていましたが、堅いところもありましたね。人に対する礼儀や公衆でのマナーなどにもうるさかったし。いつも背筋がピシッと伸びている感じで…。

明治も終わりの、四十五年生まれですが、父はやはり明治人だったのだなと思います。

四島　友人で作家の**眞鍋呉夫**さんが、「檀さんの魂を貫いていたものは、偽善に敏感で、潔く果敢な金無垢の筋金でした」と、述べておられますね。精神の貴族だったんですね。

ちちさんの所へは、作家の人たちが次々に来襲されたでしょう。

檀　おじちゃんたちが来られると、すぐに酒盛りで、父は本当に楽しそう。檀流クッキングも本領発揮でした。

いちばん印象に強い方は、詩人の**草野心平**さんですね。私は心平おじちゃんが、たいへんな詩人だとは知りませんでした。優しい飲んだくれのおじちゃんと思っていました。

小学四年のときでしたか、心平おじちゃんの絵を描いたら、それがよく似ていたので、父がおじちゃんに見せて、とてもよろこんでくれました。

四島　情景が目にうかぶようですね。

檀　心平おじちゃんが偉い人だなと思ったのは、五年生か、六年生のときでした。

社会科か国語の教科書のガイドブックでしたが、戦後の詩人や作家の一覧があって、草野心平さんの名が載っていました。

びっくりして見てみると、名前の下に何年までとなって、亡くなった人になっている。飲んだくれの心平おじちゃんかな、他の人かな。それで、父に、「心平おじちゃんは詩人なの」。「そうだよ」。「死んだの」。

「えっ」。どれ、見せてごらんとなって、父がゲラゲラ笑いだしました。さっそく心平おじちゃんに電話をかけて、「お前さん、死んでるぜ」。それからどうなったかは知りません。

四島　おかしい、おかしい。

それで、芥川賞作家の**火野葦平**さん、**九州文学**の**原田種夫**さんらとの交流は。筑後には**矢野朗**さんもいますが。

檀　残念ですが、あまり往き来がなかったようですね。私はほとんど知らないんですけど。

でも作家で、フクニチ新聞の社長さんもされた**北川晃二**さんとは、戦後早々に福岡で劇団**珊瑚座**を作った親しい仲間同士だったそうです。惜しいことに、先年なくなられましたね。

東映映画に父の勧めで

四島　ふみさんはたいへんなパーソナリティの方ですが、やはりお父上の血を感じられることが。

檀　血というよりも、そもそもこういう世界に足をつっこんだのが父のせいですから（笑）。

私はまじめに学校に通っていて、わが家の期待の星だったのです。公務員か、きちんとお給料をもらえるＯＬになるわが家で初めての人間になるつもりでした。

父の友人が東映の重役さんで、叔父も勤めていましたので、遊びに行っているところを、プロデューサーにスカウトされたのです。

四島　あれは、爽やかなニュースでしたよ。真面目な学生さんで、健康なふみさんの笑顔が、なんともいえない魅力だった。

檀　お恥ずかしい（笑）。

檀一雄の娘ということ。そして映画が東映路線のやくざ映画だということでマスコミが面白がって書いたので、評判になったのですね。

アドバルーンをあげて模様を見ていた東映も、だんだん記事がエスカレートしてきたので、父に承諾をもらいにきたんです。父は人に頭を下げられて、駄目とは言えない人でしょう。もう、決まりです。

私はそんなこと知らないから、自分で女優になりたいと言ったことは一度もない、才能もない。とても出来ないとぷんぷんです（笑）。

すると、父はずるいんです。**チャッ**

父・檀一雄氏と映画デビュー当時のふみさん。

プリンを見なさい、ジャン・ギャバンを見なさい。あとの一人は誰だったか忘れましたが、あの人たちは顔がいいか、背が高いか。いや、みんな努力の結果です、と言うんです。

世界トップの名優が、なんで努力だけですか（笑）。

四島　作家だなあ。すごい説得力（笑）。

檀　父は小説家という自分の職業を単純に肯定し、愛しているところがあって、私が小さいときに、あまり考えもなしに、父のあとを継ぐといったら、とても歓んだのです。

女優をしていれば、いい経験になるから失敗してもいい。三十ぐらいになれば、いい小説が書けるかもしれないと言っていました。

それで、私は、泣く泣くこういう世界に入ったのですよ（笑）。

四島　しかし、結局、あなたの天職を、お父上は見つけられたのですね。

檀　そうかもしれませんが、どうも女優は父の本意じゃなかったような気がします。

私がお化粧して帰ってくると「ふみは、口紅をつけるの」とか、指輪をしていると「ふみは結婚するのか」と言ったりしていました。

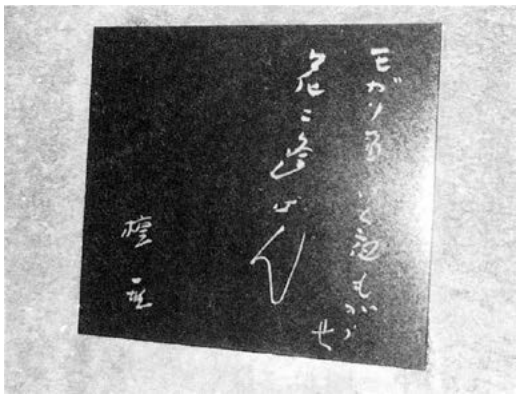
派手な生活があまり好きじゃなかったんですね。

四島　すぐれた娘を持つ父親の悩みなんだ（笑）。

檀　でも、ありがたかったのは、当時のうるさ型の監督さんの世代が、父にとは言いませんが、坂口安吾さんや太宰治さん、あのへんに憧れている世代なんですね。

だから私がいくと、「あんたはどうでもいいが、お父さんが好きでね」と言って、あまり邪険にされないんです（笑）。

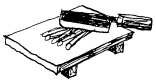
四島　檀さんや、坂口さん、太宰さんといった人たちは、我々には、胸が滾（たぎ）る存在でしたね。



モガリ笛　いく夜もがらせ
花二逢はん　（絶筆）　能古島文学碑を拡大

たしかに、私たちの世代には、時代を共にしている共感があった。いまの若い人たちと作家に、そのような歓びがあるのかなあ。

仕事はこころから ニコニコと



四島　作家である檀一雄さんが、娘さんで女優の、才女であるふみさんに話しておられたことは。

檀　私、才女じゃありませんよ。だから心配だったのでしょうね。

「仕事をするのならニコニコやりなさい」と口が酸っぱくなるほど言っていました。

これを一番先に叩き込まれたのは、東大の安田講堂攻防戦があって、家でテレビを見ていた時でしたから、中学生のころだったでしょう。

父が愛人さんとの家を引き払って、〝父帰る〟のころだったのですが、家族と、なかなか会話が弾まなかったんでしょうね。それで、すぐに料理を始めるんです。

料理が、すき間のできた家族とのよりをとりもどす、父流儀のコミュニケーションだったのでしょうね。

四島　檀流クッキングの始まりなんですね。

檀　父は子供のころから、祖父との生活で食事をつくったりしていました。

南極捕鯨船に乗ったり、アメリカの長旅、そしてポルトガルで一年ちょっとでしょう。自然に、檀流クッキングの腕をみがいていたのですね。

四島　絵も上手いし、何をやらしても一流で、人生の名人だったのですね。

檀　お客さんというと酒の肴（さかな）、そして家庭料理でしょう。私たちも手伝いに動員されるし、山のようなお皿も洗わなきゃならないしで大被害でした。娘の私は遊びたい盛りでしたのに。

四島　ちちさんは絶対だった（笑）。

檀　はい。父が大将で、母が参謀、私たち子供は三等兵でした（笑）。

ある日、夕方の五時過ぎから「はりはり漬け」をつくると言い出したのです。父が小さいころからなじんでいる、九州の漬物ですね。切り干し大根が山のように積んであるんです。

父は丁寧な声で、「はりはり漬けをつくりますから、切り干し大根を切ってください」と言うんです。父は大将ですから絶対です。思春期の私はしたいことが山ほどあったので、ふくれっ面（つら）で鋏（はさみ）を持ち出して切り始めました。

すると父が、「仕事をするときはニ

コニコしてしなさい」と烈火のごとく怒り出したんです。

父はよほど我慢がならなかったんでしょう。食事が終わると、色紙と硯を持ってこさせて、「ふみ、さとに告ぐ」と書き始めたんです。

「われ幼少の頃
五分漬けを愛したり
その甘酸く懐しき味を
子らに教えんと欲すれば
子ら　たちまち色をなす
……」

今でも読むのが恐ろしくて。うろ覚えですが…。

東大安田講堂でも今日のような、思いもしなかったことが起きる。変転流転の世のなか、お前たちも好きなようにすればいい。人間なんてすぐに滅びてしまうものだ。人生かくのごとし、と結んでありました。

四島　それはそれは。

檀　私は、御免なさい、御免なさい、と涙ポロポロでしたが、十年後に読みなさいとその色紙をくれたのです。

十年たっても、二十年たっても、安らかな気持ちでは読めません。

四島　何よりのものを、遺されて。

檀　身にしみたといいますか。どうしてもやらなくてはならないことならニコニコやろうと…。表だけでも機嫌よくしていると、心の中もそんな気になってくるかもしれない。とにかく遺言だから…と。

四島　だから、ふみさんスマイルが、すばらしいんだ（笑）。

檀　でもね、こればっかりは難しくて、どうしてもいやな顔が出てくるんですよ、時々。ま、父も原稿に向かう時は険しい顔してたからいいか。なんて自分を慰めていますけど。

四島　父と娘。父は厳しい教師、娘はいいお弟子さんなんだ。

家庭の教育不在が論議されている今日からすれば、いい時代だし、いいお父さんだったのですね。

檀　反面教師という意味でもですね（笑）。でも今日は、どんな人に会えるかしら。どんなお話が伺えるかしら、なんて考えると楽しいですものね。

父も人好きで人が集まってくると機嫌が好かったけど、そういう遺伝子を受けついでいるのかもしれません。

四島　ふみさんスマイルの秘密をうかがったんですね。私も、しびれてきたなあ（笑）。

そのようなお父上、檀一雄さんは、ふみさんのお仕事を、よく御覧になっていましたか。

檀　それが全然で。女優になりなさいと言ったくせに、女優、檀ふみ出演の映画やドラマは、多分、見たことがないでしょう。

四島　それは父親の照れですよ。娘の演技をまともには、父親は照れくさくてとても見ておれない。

檀　ただ、今はなくなりましたけれども、ＮＨＫテレビの**連想ゲーム**に出ていた時には、毎回、楽しみに見て、ハラハラしてくれました。

四島　そりゃ、聡明な娘さんが地のまま出ておられる。はらはらしても、誇らしく、楽しんでおられたのですよ。

檀　ふみさん

ふみこちゃん青春はのんびりするもの

檀　いつだったか、音楽関係の方から歌を唄ってはと、すすめられたことがありました。

それで、家族で紅白歌合戦を見ていたときに、兄が「ふみも、来年はこの中で歌ってるかもしれないな」と言ったのです。すると父が、「えっ、ふみがこんなことをやるのなら、俺は、あそこの松の木で首をくくるよ」と言いました（笑）。

だから、どうも父は芸能界を、本質的に好きではなかったのですね。

四島　お二人とも忙しくて、すれ違いばかりだったのでは。

檀　仕事のラッシュで、朝早く家を出て夜遅く家に帰る生活が続いて、父に「おはようございます」と「おやすみなさい」の挨拶だけという生活のときがありました。

父は、家では私を〝ふみこちゃん〟と呼んでいましたが、私が大切なものを忘れていると思って、見かねたのでしょう。

「ふみこちゃん。青春というのは、のんびりするものでもあるんだよ」と言いました。

四島　いいなあ。その通りですよね。

檀　さきほど、父を詩人だとおっしゃったでしょう。

私は親バカならぬ子バカで申し訳ないんですけど、父は生きる詩人だったというか、生き方が詩みたいなところがあったと思います。

現実には生きるのに忙しくて、あまり詩は残していません。でも、晩年は子供たちに贈る言葉のようなものを、よく書いてくれていました。

人生は、白紙に書き込みをしていくもの。だから多難であればあるほど、人生の実りが大きいんだ。そのような事を、書いたエッセイもあります。

人生多難は当然。自分の炬火をかざしながら、困難を乗り越えて生きていけ。そこに、詩があり、文学が生まれる。こころがひ弱な子供たちが気がかりだったのでしょうが、自分に申し渡してもいたのでしょうね。

四島　生きかたの厳しい世界に、娘さんをおくりこんだ、作家、檀一雄のまたべつの笛の音を聞く思いですね。

作品をもう一度、読ませていただきましょう。

いいお話を、ありがとうございました。

■檀ふみさん　略歴

東京都生まれ。作家、檀一雄氏の長女。慶応大学経済学部卒。72年に「昭和残侠伝・破れ傘編」（東映）でデビュー。NHKの大河ドラマ「春の波涛」「花の乱」「連想ゲーム」などに出演。NHKのドラマ「蔵」を好演し、「N響アワー」についで「日曜美術館」の司会も。エッセー、対談集も多彩。

必敗の戦士

お話　作家　眞鍋呉夫氏
聞き手　福岡シティ銀行広報室顧問　土居善胤

■檀一雄さんに三十年間兄事されましたね。最初の出会いは。

眞鍋　珍しく当時のメモが残っていたせいもあって、その日のことは、今でも昨日の出来事のように覚えています。

ぼくは昭和二十年の九月に復員して以来、妻と福岡市高宮の父母の家に寄食していました。檀さんが訪ねてきてくれたのは律子夫人がなくなってから約一ヶ月後にあたる、昭和二十一年五月十九日の夕方のことでした。

ぼくは、その日は二階の仕事部屋で、三島由紀夫の「わが世代の革命」という原稿に眼を通していました。その原稿は北川冕二君と創刊の準備を進めていた文芸雑誌『午前』のために依頼したものでしたが、そのうち、たてつけの悪い玄関の引戸をあける音がしたと思うと、階段の下から「ダンさんというかたがきとんなさるばい」という、母の声が聞こえてきました。

そこで、急いで玄関に出てみますと、毬栗頭に灰墨色の国民服を着た檀さんが太郎さんを肩車にして窮屈そうに首を縮めて立っていました。

檀さんはその時、男ざかりの三十四歳で、口のまわりは文字どおり黒い針のような無精髭におおわれていましたが、太い・黒縁の眼鏡の奥には、ややロンパリ気味の魚眼がしんとみひらかれていました。とにかく、そうしてむかいあっているだけで、なにか高圧の電流のように激しい精気がびりびり伝わってくるような感じでした。

すると、檀さんが太郎さんの細い足首を握ったまま、ちょっと上眼づかいになって「これが太郎、ぼくの首かせです」とぼくに言いました。

そこで、まだ三歳にもなっていなかった太郎さんが「ん？なーん？チチ、いまなんていったの？」と檀さんの顔を覗きこむのへ、檀さんは間髪を入れず「眞鍋おじちゃんにね、太郎は父の首かざりですって、そげん言うたとたい」。そう言って笑いながら、太郎さんを肩越しに抱きおろして、すとんとあがり口の板の間に立たせました。

そういえば、『リツ子・その愛』の中にも「私は全く天真にふるまった。自分のエゴイズムに即してだ」という記述が出てきますが、作者がそこで言いたかったことは、無論「人間は誰でも自分がいちばん可愛い」などというしたりげな人生観ではありません。

そうではなくて、相手が異性であると否とを問わず、憐憫や同情や血縁や因習をぬきにした、対等で率直で人間的な関係への、ほとんど自分でも如何ともしがたいほど強烈な志向です。

つまり、ひとが生きるということは、それぞれが己の力を尽くして、眼に見えない「首かせ」を「首かざり」にかえていくことではないか、という簡明な問いかけです。

ですからぼくには尚更、その時の檀さんと太郎さんとの短いやりとりが、それから四年後に刊行された『リツ子・その愛』と『リツ子・その死』の出現を、失われた愛と美へのたぐいまれな哀歌であることが、即ちさわやかでみずみずしい生命への賛歌でもあるような、あの名作の出現を、予言していたような気がして忘れられないんです。

■それから、親交を深められて。

眞鍋　ええ。一週間に一度は訪ねたり訪ねられたりして、夜おそくまでしゃべりあったことを覚えています。

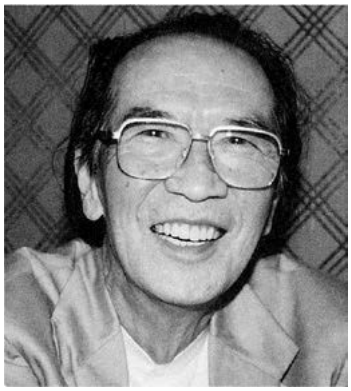
ところが、そうした往来がしばらくとだえたのは、檀さんがその年の夏に、山門郡東山村の善光寺という山寺の屋根裏部屋に移ったからでした。

ぼくが善光寺を訪ねたのは、たしかその年の「後の月（旧暦九月十三日の名月）」の当夜のことでしたが、檀さんのあとから手さぐりでその屋根裏部屋への階段をのぼっていった時には、息をのまずにはいられませんでした。

吹きぬけの荒壁に囲まれた二十畳前後のだだっぴろい空間に、ままごとめいた煮たきの道具がひとそろい。その奥に、古畳が二枚と綿がはみだした薄い蒲団。それから、小さな経机と文庫本の『杜詩』が一冊。そのほかには、畳もなければ、障子もありません。

窓がまちが腐っているので、雨戸を閉めることもできません。しかも、その腰窓からさしこんだ月光が、荒挽きの床板に分あつく積もった綿ぼこりを霜柱のように輝かせていたからです。

檀さんはそれでも「一週間に一度、瀬高や船小屋で鰯を六匹ずつ買ってくるんです。その鰯を太郎と二人で最初の日は二匹ずつ、次の日は一匹ずつたべるのが楽しみでね」そんなことを言って、くったくなく笑っていました。



眞鍋　呉夫 氏

■名作「リツ子」シリーズが始まる前ですね。

眞鍋　そうです。その夜も、善光寺への山道をたどりながら「律子のことでは、書きたいことが頭の中でひしめきあっているような感じで、机の前にすわりさえすれば、すぐにも書きだせるような気がしてるんです。ただ、ぼくの従軍中の体験をどこでどう生かすかがむずかしくてね。そこを、どうしたらいいかと考えてるところなんです」と話してくれたことを記憶しています。

戦後、作家や思想家が混迷していた中でも、檀さんの言行は闊達で「天馬空を行く」ような観がありましたね。

檀さんは青年時代から人一倍不羈奔放で、およそ事物の偶像化や絶対化に対しては、けたはずれに鋭敏な拒絶反応の持ち主でした。

たとえば、後に草野心平さんなどと一緒に中国に招かれたときにも帰国後「なにしろ、どこへ行っても毛沢東の肖像画だらけですからね。あれじゃぼくなんか、とても生きていけませんよ」と言って、苦笑していました。

ですから、戦後の一時期には「今の日本人は戦争に負けて、提灯の火が消えたみたいに焼け跡にへたりこんでしまっている。ぼくはそんな連中の尻に火をつけて回りたいんだ」。そんなことを言って、自分のことを「生命の放火魔」と称していたこともありましたよ。

■その気持ちが、劇団「珊瑚座」の結成に。

眞鍋　そうでしょうね。檀さんは徴兵検査の時にも、甲種合格の山砲兵として入隊したくらいで、文壇では珍しく頑健な体の持主でした。

それだけに、一字一字、原稿用紙の升目を埋めていくのがもどかしくなるような一面もあり、かたがた中央のジャーナリズムもまだ活動を再開していませんでしたから、その前に、戦後の焼け跡の真っ只中で、身体的な表現とその反応がもたらす開放感を、生命の花火のように打ち上げてみたかったのじゃないでしょうか。

■檀さんを囲む文学の師や仲間も、壮観ですね。

眞鍋　檀さんはその文章の中で、文学の師は佐藤春夫先生、私淑した先輩は川端康成さんと瀧井孝作さん、影響を受けた友人は太宰治、安田與重郎、坂口安吾の三人を列挙するのが常でした。

中でも太宰治については、彼が同人雑誌に発表した二つの短篇原稿を読んだだけで、彼のアパートに乗り込んでいって、直接「君は天才だ」と太宰に言い、ぼくらにも「あの甘美な文体は、百年に一人ぐらいしか生まれない」と言っていたほど高く評価していました。

■先生は、檀さんの魅力には、芭蕉のいわゆる「夏炉冬扇」の世界に通じるものがある、とおっしゃっていますね。

眞鍋　「夏炉冬扇」という言葉は、夏のストーブと冬の扇風機を組みあわせた対語ですから、「何の役にも立たぬ

もの」という意味になりますが、芭蕉は当時の人たちから「婀娜なる人」と言われていたそうです。

もっとも、この場合の「婀娜」という言葉は両義的で、その一つは「徒花」の「徒」と同じく「はかない」という意味、もう一つは「色っぽい」という意味だそうです。つまり、芭蕉は誰よりも人間という存在のはかなさをよく自覚していたからこそ、いくつになっても齢よりはうんと若く、色っぽく見えた、というんですね。

そういう意味では、俗に「破滅型の浪漫派」といわれた檀さんの魅力にも、みずから「狂俳」たらんと志さずにはいられなかった芭蕉の生きかたに似たようなところがあったのではないでしょうか。

いや、げんに檀さんは「埋葬者」という短編の中で「それがよし幻影であろうと、虹であろうと、過ぎてゆく長大な時間の中の必敗の戦士であれ。無限のものが有限のものを翻弄する日の手口に乗るな。必敗の戦士であるからこそ、有限の生命を鍛冶して、この帰結のない戦いをいどめ」と書いています。

ぼくは今年の「花逢忌」の会場で「はじめて檀さんに会った時、女性に生まれてこなくてよかったと私は思いました。もし女性に生まれていたら、無我夢中で檀さんを追っかけたにちがいないからです」とそんなばかな事を言って、皆さんから笑われましたが、ありし日の檀さんの精悍な言動にはそれほど圧倒的な魅力がありました。

しかも、その檀さんがわれわれに残していってくれたものは、世に「天馬空を行く」と称された果敢な詩魂の眩い軌跡そのものにほかなりません。ですから、ぼくは今でもその甘美な詩文を読み返すたびに、

金剛の露ひとつぶや石の上

という古人の詠嘆がよみがえってくるのを感じながら、なにか自分の本然に則した修羅の道に直面しているような気がしてきて、一種の戦慄をおぼえずにはいられないんです。

■眞鍋呉夫氏　略歴

小説家、俳人。大正九年（一九二〇）、福岡県岡垣町に出生。代表作に「二十歳の周囲」「サフォ追慕」「黄金伝説」「天馬漂泊」「評伝檀一雄」など。句集「雪女」で平成四年度歴程賞、および読売文学賞を受賞。

●平成4年1月25日発行―08・9③
●本シリーズは、インターネットに全編掲載中です。
http://www.ncbank.co.jp

●司会・構成・文責
「博多・北九州に強くなろう」編集主幸
土居善胤

●発行
〒812-0011 福岡市博多区博多駅前一丁目三番六号
西日本シティ銀行(広報文化部)
TEL 092・461・1869

「檀一雄」略年譜

明治 45年(1912)	0歳	檀参郎・トミの長男として、父の任地、山梨県南都留郡谷村町に出生。
大正 5年(1916)	4歳	東京(谷中)から久留米へ。妹三保出生。
6年(1917)	5歳	父の転任により、福岡市鳥飼に住む。妹寿美出生。
7年(1918)	6歳	福岡県三井郡国分男子尋常高等小学校に入学（現、久留米市)。
8年(1919)	7歳	父の転勤先栃木県足利尋常高等小学校に転校。
9年(1920)	8歳	国分村の小学校に転校。妹久美出生。
10年(1921)	9歳	足利尋常小学校に戻る。母トミ、寿美を連れ出奔。
12年(1923)	11歳	この年より夏休みと冬休みに、妹たちが預けられている福岡県柳川の沖端の家への帰省が慣わしになる。
13年(1924)	12歳	足利尋常小学校卒業。県立足利中学校(旧制)入学。
昭和 3年(1928)	16歳	足利中学校卒業。福岡高等学校(旧制)入学。
7年(1932)	20歳	福岡高等学校卒業。東京帝国大学経済学部に入学。
8年(1933)	21歳	母トミと再会。太宰治を知り、佐藤春夫の門弟となる。
9年(1934)	22歳	坂口安吾、中原中也を知る。
11年(1936)	24歳	「夕張胡亭塾景観」で第二回芥川賞候補。東京帝国大学卒業。「花筐」を文藝春秋に発表。旧、満州地区放浪。
12年(1937)	25歳	「花筐」出版予定日に、日華事変初の動員令により久留米独立山砲兵第三聯隊に入隊(15年、召集解除)。
17年(1941)	29歳	5月、高橋律子と結婚。東京石神井公園の池畔に居住。16年より短編、詩作多数。
18年(1943)	31歳	長男、太郎出生。
19年(1944)	32歳	報道班員として中国戦線へ(7月～翌20年5月)
20年(1945)	33歳	8月15日終戦。腸結核の妻、律子を連れて福岡県糸島郡西浦村小田(現、福岡市)に疎開。
21年(1946)	34歳	4月、妻、律子病死。山門郡東山村の善光寺に仮寓。11月、与田準一の紹介で、山田ヨソ子と結婚。
22年(1947)	35歳	眞鍋呉夫、北川冕二らと劇団「珊瑚座」を設立。
23年(1948)	36歳	太宰治死。東京都練馬区南田中に居住。この年より「リツ子」の連作を『人間』『改造』『群像』などに発表。
25年(1950)	38歳	「リツ子」もの連作を完成『リツ子・その愛』『リツ子・その死』を刊行。次男、次郎出生。練馬区石神井へ転居。
26年(1951)	39歳	「長恨歌」「真説石川五右衛門」により、第24回直木賞受賞。南氷洋捕鯨船団に参加(12月～翌27年4月)
28～29年	28年、三男、小弥太出生。29年、長女ふみ出生。	
30年(1955)	43歳	坂口安吾死。次郎日本脳炎に。「誕生」発表。この作品は「火宅の人」の第一章「微笑」の一部となる。
31年(1956)	44歳	次女、さと出生。「火宅の人」矢島恵子のモデル新劇女優入江久恵と出奔。「夕日と拳銃」東映映画に。
33年(1958)	46歳	アメリカからヨーロッパへ(10月～翌34年4月まで)。
36年(1961)	49歳	「火宅の人」の第一章「微笑」を「新潮」に発表。以後41年8月まで、各誌に発表。
37年(1962)	50歳	自宅へ帰ることが多くなる。
38年(1963)	51歳	「火宅の人」の連作8篇を「新潮」へ。
39年(1964)	52歳	師、佐藤春夫死去。ソヴィエト旅行。次郎死す。
41年(1966)	54歳	「火宅の人」の連作「有頂天」を「新潮」へ発表(44年1月まで中断)。
42年(1967)	55歳	オーストラリア・ニュー・ジーランドへ。
43年(1968)	56歳	季刊文芸誌『ポリタイア』創刊。
44年(1969)	57歳	「火宅の人」2年5か月ぶりに連作執筆を、再開。
45年(1970)	58歳	ヨーロッパ・ポルトガルのサンタ・クルスに滞在。(11月～2年後の47年2月まで)。
48年(1973)	61歳	体の不調をうったえだす。
49年(1974)	62歳	7月、福岡市能古島に「月壺洞」を購入し移住。
50年(1975)	63歳	二日市の柳沢病院に入院。6月九州大学病院に転院。肺ガン腫症の診断。「檀一雄詩集」刊行。「火宅の人」最終章を口述し完結。
51年(1976)	64歳	1月2日死去。法名、檀林玄遊居士。「火宅の人」に読売文学賞、日本文学大賞。
52年(1977)	65歳	能古島の思索の森入口に文学碑建立。檀一雄全集発行。

〈主要作品〉

●**小説**　「花筐」「小説太宰治」「リツ子・その愛」「リツ子・その死」「長恨歌」「真説石川五右衛門」（正・続）「ペンギン記」「木曾義仲（上・下）」「夕日と拳銃（3部作）」「真書太閤記（藤吉郎篇）」「光る道」「風の中の青春」「海のある窓」「小説坂口安吾」「火宅の人」「わが青春の秘密」…など

●**エッセイ**　「青春放浪」「わが百味真髄」「檀流クッキング」「風浪の旅」「王様と召使い（ユーモアエッセイ集)」ほか

●**詩集**　「檀一雄詩集」